

なか たか ね な な やま
市原市中高根南名山遺跡

1 9 9 5

市原市土木部道路建設課
財団法人 市原市文化財センター

序 文

千葉県ほぼ中央部、房総半島の付け根に所在する市原市は、南北に流れ東京湾に注ぐ養老川を擁し、海・川・里・山と恵まれた自然と人との調和のとれた市であります。このように恵まれた自然の下、大昔から多くの人々が生活を営んできました。上総国分僧・尼寺跡を始めとして市内には祇園原や西広などの大きな貝塚、「王賜」銘鉄剣が発見された稲荷台1号墳などの著名な古墳など数多くの遺跡が今に残されています。一方では、市内の地域開発は急速に進展してまいりました。そのためにこれらの貴重な埋蔵文化財の保護と、生活に欠かせない開発との間に調和が強く求められるようになりました。

養老川の西岸部、東京湾に面する姉崎台地上から内陸部にかけても幾つかの遺跡が残されております。これら内陸部の遺跡は、数も少なく遺構もさして多くないものが主となりますが、かえってそのために貴重なものとも言えましょう。近年考古学界で話題を呼んでいる市内山田橋の大塚台遺跡・表通遺跡、袖ヶ浦市山野遺跡など幾つもの遺跡で発見されている古代道や鎌倉街道の延長がこの地にあるのではないかと考えられています。

今回ここに報告する南名山遺跡は、市道6018号線の改良工事に先立って南北1 kmを越える範囲で5年次にわたって発掘調査が行われたもので、遺跡のほぼ全面で古代から中世にかけて用いられていた道の跡が確認され、古墳時代や奈良平安時代の埋葬のための施設なども見つかっております。

本報告書は、これらの成果をまとめたもので、それぞれの分野の研究者各位への資料提供を果たすとともに、広く市民の皆様の埋蔵文化財に対する関心と理解に貢献できれば幸いに存じます。

数次にわたる発掘調査および本書の刊行に際し、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会ふるさと文化課ならびに市原市土木部道路建設課などの関係諸機関の御指導、御協力を頂きましたことに厚く御礼申し上げます。

平成 7 年 3 月 31 日

財団法人 市原市文化財センター
理 事 長 佐 野 年 男

例 言

1. 本書は、市原市土木部道路建設課による市道6018号線の道路改良工事に先行して行われた埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。
2. 発掘調査は、千葉縣市原市中高根字南名山から上高根字駒野にかけて所在する南名山遺跡の工事によって破壊される部分の記録保存を目的として行われた。
3. 発掘調査は、市原市土木部道路建設課の委託を受け、千葉県教育委員会、市原市教育委員会の指導の下、財団法人市原市文化財センターが実施した。
4. 発掘調査、整理作業は下記の通り行った。また、財団法人市原市文化財センターの調査コードは各行末に記した通りである。

昭和60年10月16日～11月21日	第2地点調査	担当	田所 真	セ-66
平成元年10月1日～11月30日	第3地点調査	担当	田中茂良	セ-110
平成2年10月1日～10月31日	第6地点調査	担当	高橋泰男	セ-124
平成3年9月20日～11月12日	第1・第5地点調査	担当	田中茂良	セ-140
平成4年6月16日～6月30日	第4地点調査	担当	半田堅三	セ-154
平成6年7月1日～9月30日	整理作業	担当	半田堅三	
5. 本書の執筆は、半田堅三が行った。
6. 挿図中の方位矢印は座標北である。トレンチ配置・本調査範囲図中のドットは確認トレンチ、斜線は本調査として拡張した範囲を示す。

平成6年度財団法人市原市文化財センター組織表

役 員		職 員	
理 事 長	佐野年男（専任）	庶務課	
副理事長	山口唯一（市教育委員会生涯学習部長）	課 長	古宮祐助
常務理事	鈴木太郎（専任）	主 事	大鐘光江
理 事	寺村光晴（和洋女子大学教授）	主 事	阿部茂之
理 事	加藤晋平（国学院大学教授）	調査課	
理 事	木村千春（郷土史家）	課 長	米田耕之助
理 事	植草久善（市教育委員会教育長）6,7,14逝去まで	係 長	田中清美
理 事	大野 皎（市教育委員会教育長）6,7,19より	主任調査研究員	大村 直
理 事	石井作二（市企画部長）	主任調査研究員	小出紳夫
理 事	加瀬睦郎（市総務部長）	主任調査研究員	田所 真
理 事	田中俊夫（市都市計画部長）	調査研究員	忍澤成視
監 事	斎藤初男（市出納室長）	調査研究員	小川浩一
監 事	田邊義夫（市教育委員会総務課長）	調査研究員	櫻井敦史
		調査研究員（囑託）	半田堅三
		主 事	高浦貞子

財団法人市原市文化財センター組織表については、調査期間が多年にわたり全てを掲載するには紙数が不足するため整理報告を行った平成6年度のみを掲載する。他の年度については、それぞれの年度の年報、報告書などを参照されたい。

本文目次

序文

例言・財団法人市原市文化財センター組織表

1	調査の経緯	1
2	遺跡の立地と環境	1
3	各地点の調査	4
1)	第1地点の調査	4
2)	第2地点の調査	7
3)	第3地点の調査	8
4)	第4地点の調査	8
5)	第5地点の調査	11
6)	第6地点の調査	14
4	各地点出土の遺物	16
5	結び	18

挿図目次

第1図	南名山遺跡と周辺の遺跡	2
第2図	周辺の地形と調査範囲	3
第3図	第1地点トレンチ配置・本調査範囲	4
第4図	第1地点拡張区北半実測図	5
第5図	第1地点拡張区南半実測図	6
第6図	第2地点トレンチ配置・本調査範囲	7
第7図	第3・第4地点トレンチ配置・本調査範囲	8
第8図	第3地点方形周溝状遺構・道路状遺構実測図	9
第9図	第4地点全体図	10
第10図	第5・第6地点トレンチ配置・本調査範囲	11
第11図	第5地点北側・中央トレンチ実測図	12
第12図	第5地点南側トレンチ実測図	13
第13図	第6地点北側拡張区方形周溝状遺構実測図	14
第14図	第6地点南側拡張区道路状遺構実測図	15
第15図	各地点出土の遺物①	16

写真図版目次

図版1	第1地点の調査①	図版7	第3地点の調査③
図版2	第1地点の調査②	図版8	第4地点の調査
図版3	第2地点の調査①	図版9	第5地点の調査
図版4	第2地点の調査②	図版10	第6地点の調査①
図版5	第3地点の調査①	図版11	第6地点の調査②
図版6	第3地点の調査②	図版12	各地点出土の遺物

1 調査の経緯

椎津川上流域の台地上を南北に縦貫する市道6018号線は、近年ゴルフ上の増加や当地域の都市化が進むとともに狭小化が目立ち始め拡張などの改良工事が必要となった。この地は南名山遺跡として周知の遺跡であり、近隣に南原遺跡などの調査の行われた遺跡も存在することから、事前の調査を行うことになった。調査は、道路工事の進捗に伴い、昭和62年度から開始し、平成元年・2年・3年・4年の5年次にわたり、6地点にわけて実施された。

2 遺跡の立地と環境

椎津川の上流河川深城川と養老川に挟まれた、市原市中高根字南名山を中心として上高根字駒野にかけての標高約80mの洪積世台地上に南名山遺跡①がある。「市原市埋蔵文化財分布地図―北部編―」には遺跡番号221番として縄文時代の遺物包蔵地として登録されている。

近隣の遺跡としては、まず西に隣接する南原遺跡②がある。この遺跡では2次にわたって発掘調査が行われ縄文時代草創期（上黒岩並行期）の所産と考えられる石器群がまとまって発見されている。また北側に堀込貝塚③、東側に上高根貝塚④などの貝塚も知られている。

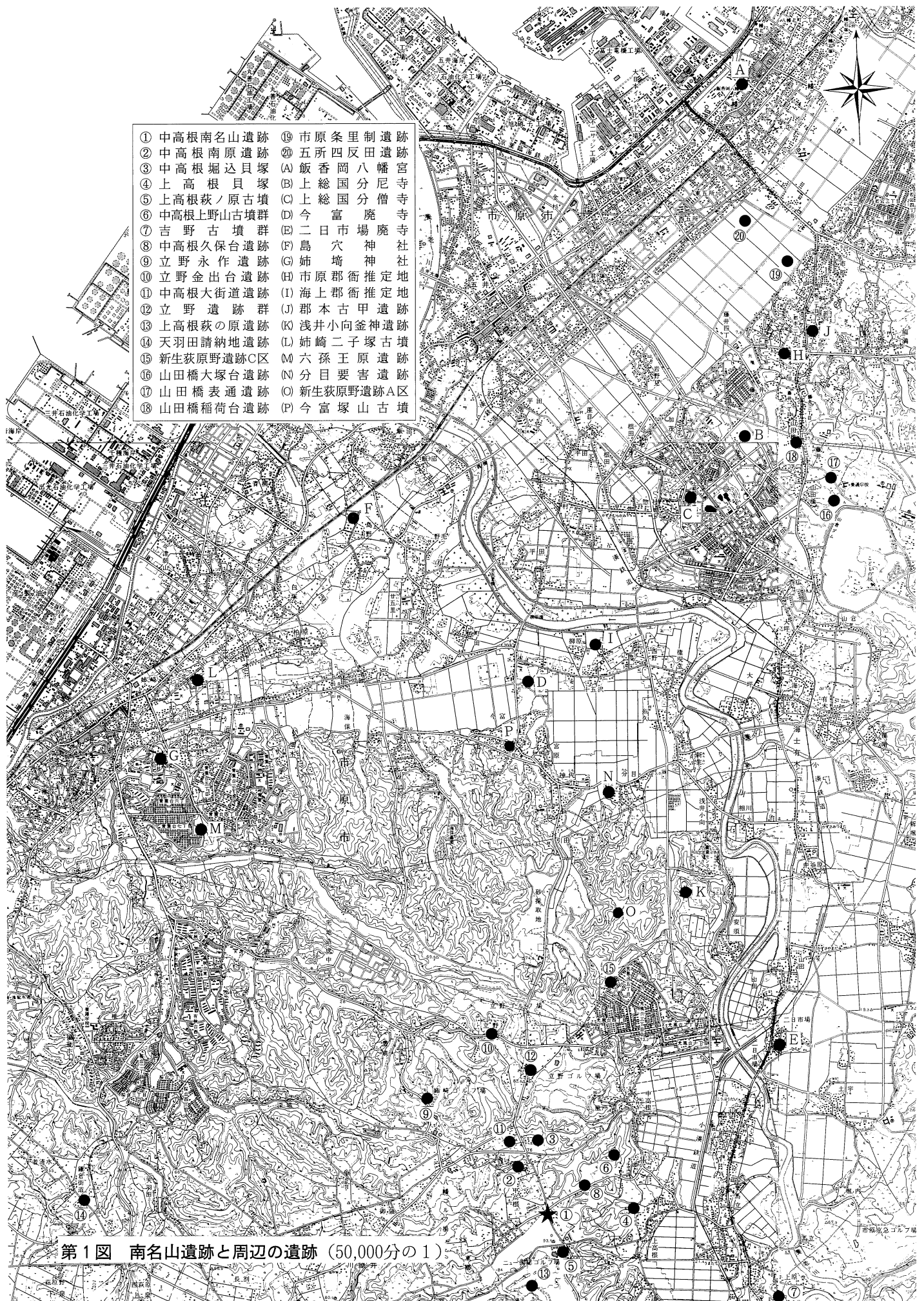
古墳時代の遺跡としては、すぐ南に萩ノ原古墳⑤がある。現況で径16m高さ2mを測る円墳である。また、東側には上野山古墳群⑥、南東に吉野古墳群⑦といった大規模な古墳群が存在する。

次に奈良～平安時代になると、東側に隣接して久保台遺跡⑧が知られるほか、北西に永作遺跡⑨、北に金出台遺跡⑩などの製鉄遺跡が知られている。

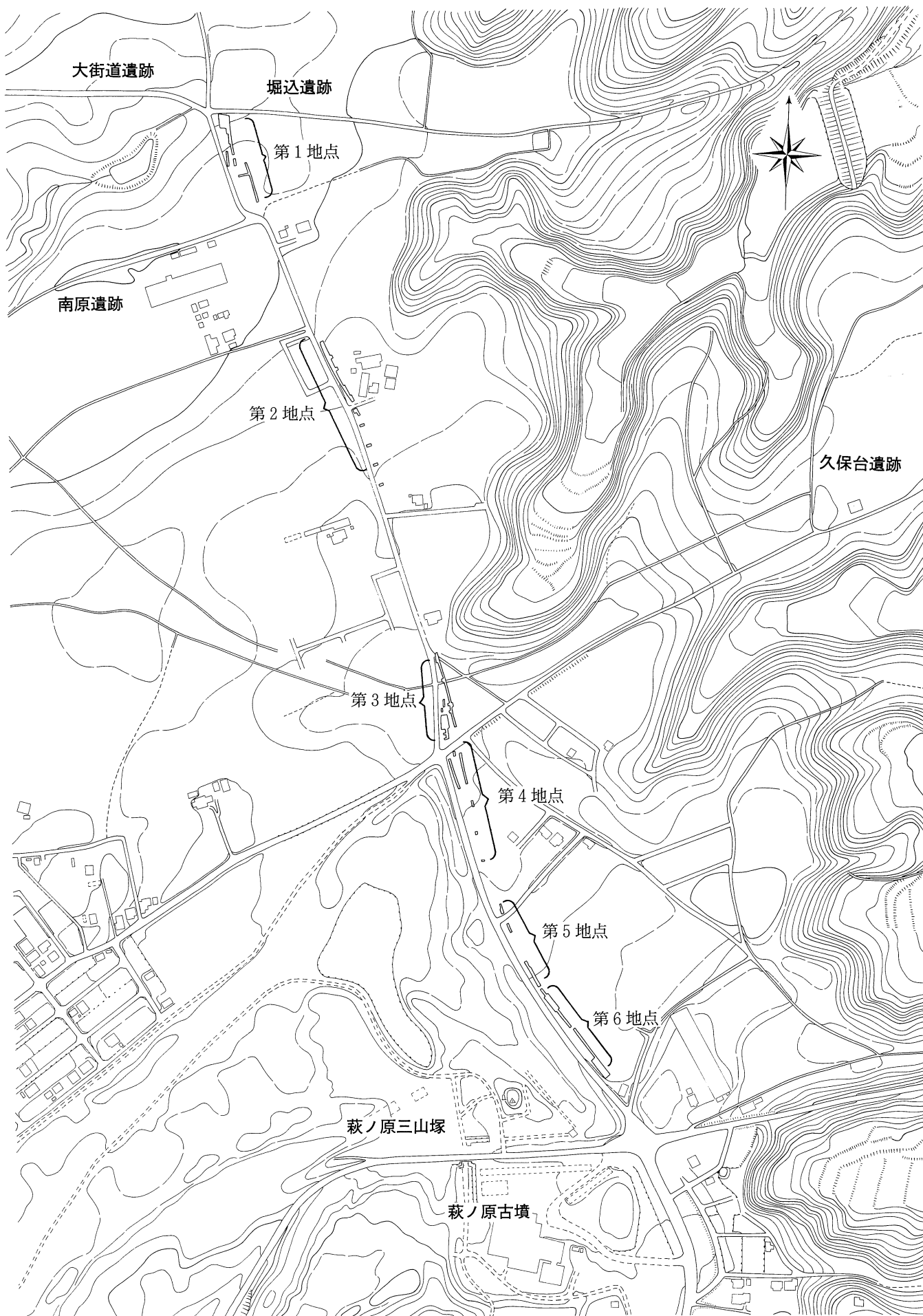
古代から中世にかけて、この地は駅路や鎌倉街道の推定地となっているが、北西側近接地に大街道遺跡⑪があり、さらに北へ行くと立野遺跡群字鎌倉街道⑫が存在する。南には萩の原遺跡⑬があり萩の原廃寺が調査されている。遺跡の西、袖ヶ浦市との境界にある請納地遺跡⑭は、その主体となる部分が袖ヶ浦市野田字鎌倉街道にあり県の台帳では鎌倉街道C遺跡として登録されており、ここから川原井字鎌倉通、中高根字大街道、立野字鎌倉街道を通る街道が推定できる。この延長をたどると新生萩原野遺跡⑮で幅4mほどの道路跡が現道に並行して確認されている。これらの道路跡は途中で不明瞭になりながらもはるか北の山田橋大塚台遺跡⑯、表通遺跡⑰でも検出されている。さらにここでは中世以後の道路跡と一部重なるように古代の道路と思われる幅4mと6mの側溝を持つ道路跡も検出されている。同じ山田橋の稲荷台遺跡⑱とその北側の低地にある市原条里遺跡⑲、五所四反田遺跡⑳でも古代の駅路と思われる幅6m以上の側溝を持つ道路跡が検出されている。

この地を北から順に見ていくと、飯香岡八幡宮（A）、上総国分尼寺（B）、上総国分僧寺（C）、今富廃寺（D）、二日市場廃寺（E）と並び、西には島穴神社（F）、姉埦神社（G）の存在が知られ、上総国分二寺の北には市原郡衙推定地（H）、今富廃寺の近くには海上郡衙推定地（I）がある。上総国府推定地の一つとされる古甲遺跡（J）では東西方向の大規模な溝や大型の掘立柱建物跡が検出されるなどの調査例もあり、古代道、鎌倉街道は、古代から中世の社寺や古代・中世の遺跡と有機的なつながりを持って存在していたようで、それらの社寺や遺跡をつなぐ位置にある南名山遺跡の調査でも各地点で道路状遺構が検出され期待がもたれる所であった。

（以上の①～⑳・（A）～（J）は、第1図中の①～⑳・（A）～（J）に対応する）



第1図 南名山遺跡と周辺の遺跡（50,000分の1）



第2図 周辺の地形と調査範囲（5,000分の1）

3 各地点の調査

5年次6地点にわけ実施された発掘調査を今回まとめて報告するにあたり、報告書の記述は調査順ではなく北から順に第1～第6地点にわけを行った。

当時の担当者による概要のあるものはそれをもとに、他の部分は図面・写真をもとに記述を行い、所在地・調査期間・調査面積・担当者・現況などは、各項目の頭初に列記した。

1) 第1地点の調査

北端に当たる第1地点は、平成3年に第5地点とともに調査が実施された。そのため、所在地以下現況までは、両地点を合わせたものである。

所在地 市原市中高根字恵方1335-2 地先他

調査期間 平成3年9月20日～10月12日(確認)、10月14日～11月12日(本調査)

調査面積 1890㎡の10%、189㎡(確認)、296㎡(本調査)

担当者 田中茂良

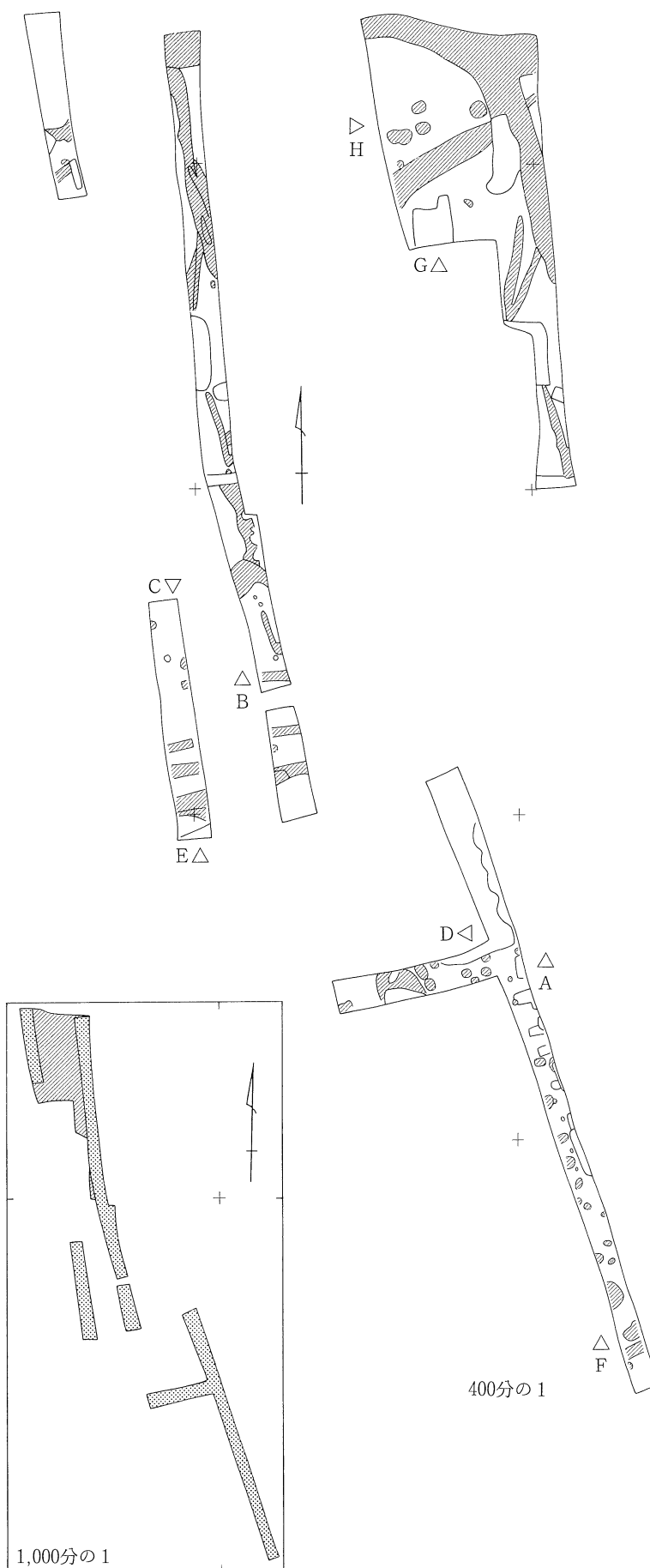
現況 山林、荒蕪地、宅地

確認調査

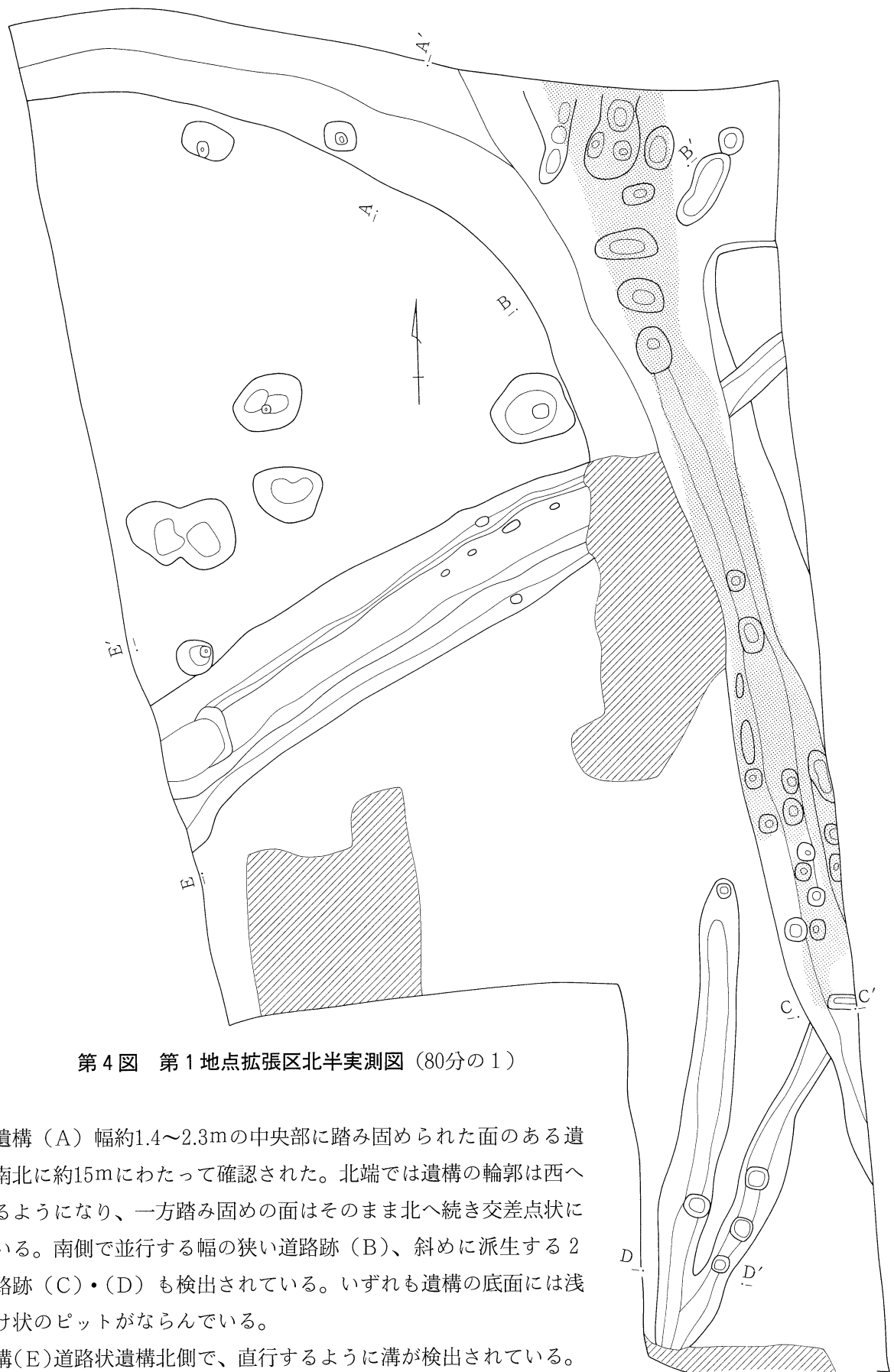
道路に並行して5本、直行して1本のトレンチを地形、調査範囲の形状に合わせて設定して確認を行った。

中央部に民家があったため攪乱が激しく、南側についても木根跡や攪乱がほとんどで遺構は少なかった。

北側2本のトレンチで、東では中央に踏み固めの跡のある道路跡、西で東西方向の溝が確認され、この間を拡張して本調査を行った。



第3図 第1地点トレンチ配置・本調査範囲

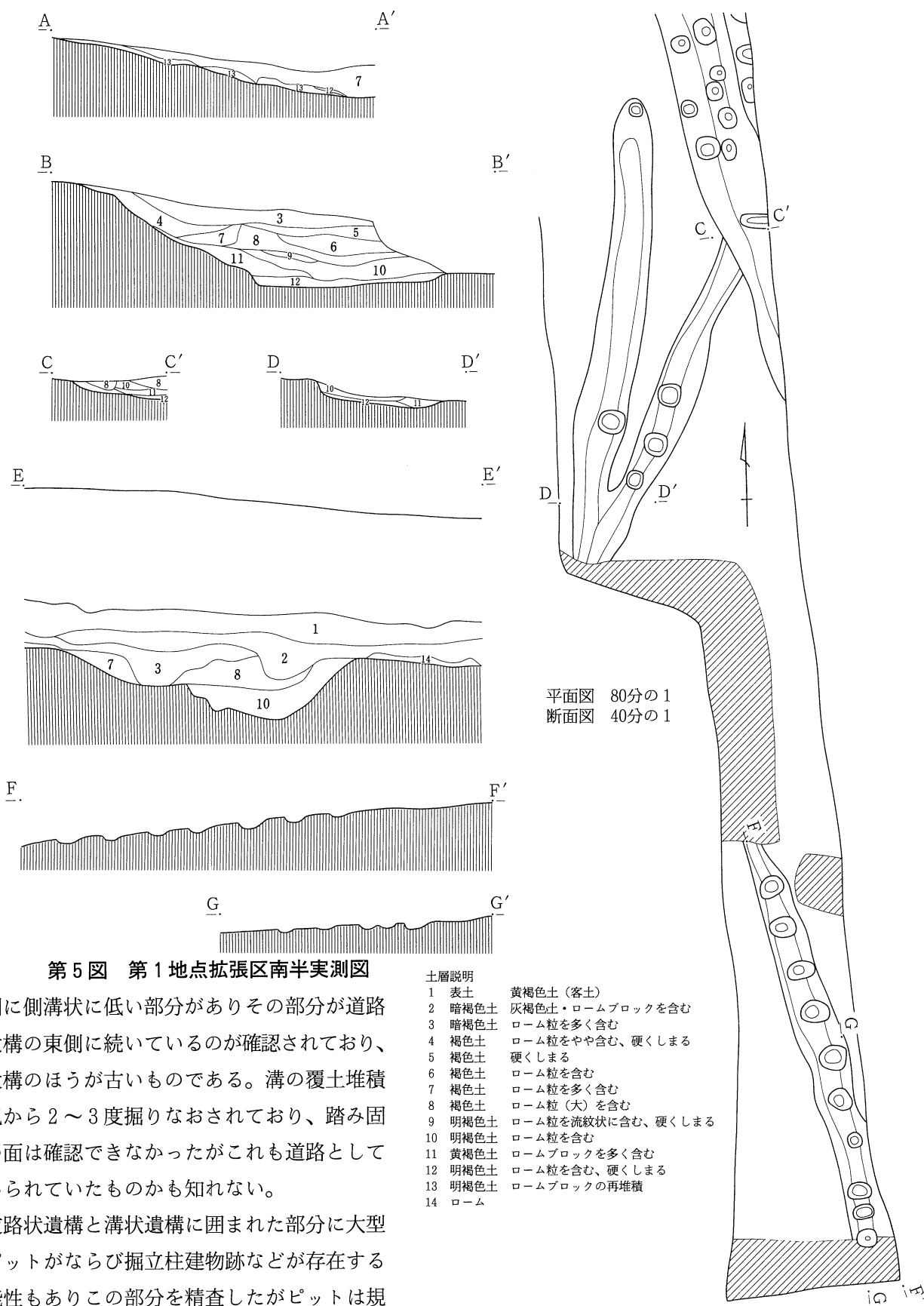


第4図 第1地点拡張区北半実測図（80分の1）

本調査

道路状遺構（A）幅約1.4～2.3mの中央部に踏み固められた面のある遺構で、南北に約15mにわたって確認された。北端では遺構の輪郭は西へ屈曲するようになり、一方踏み固めの面はそのまま北へ続き交差点状になっている。南側で並行する幅の狭い道路跡（B）、斜めに派生する2条の道路跡（C）・（D）も検出されている。いずれも遺構の底面には浅い足掛け状のピットがならんでいる。

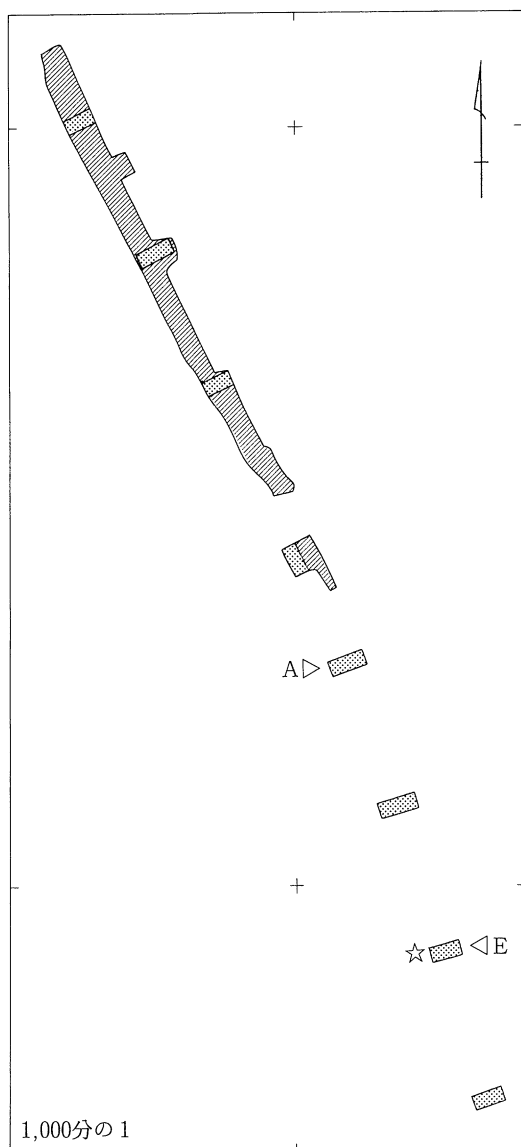
溝状遺構（E）道路状遺構北側で、直行するように溝が検出されている。



第5図 第1地点拡張区南半実測図

北側に側溝状に低い部分がありその部分が道路状遺構の東側に続いているのが確認されており、本遺構のほうが古いものである。溝の覆土堆積状況から2～3度掘りなおされており、踏み固めの面は確認できなかったがこれも道路として用いられていたものかも知れない。

道路状遺構と溝状遺構に囲まれた部分に大型のピットがならび掘立柱建物跡などが存在する可能性もありこの部分を精査したがピットは規則的には並ばず、また柱痕跡なども検出できなかった。



第6図 第2地点トレンチ配置・本調査範囲

2) 第2地点の調査

所在地 市原市中高根字南名山1340-2地先他

調査期間 昭和62年10月16日～11月21日（確認、本調査）

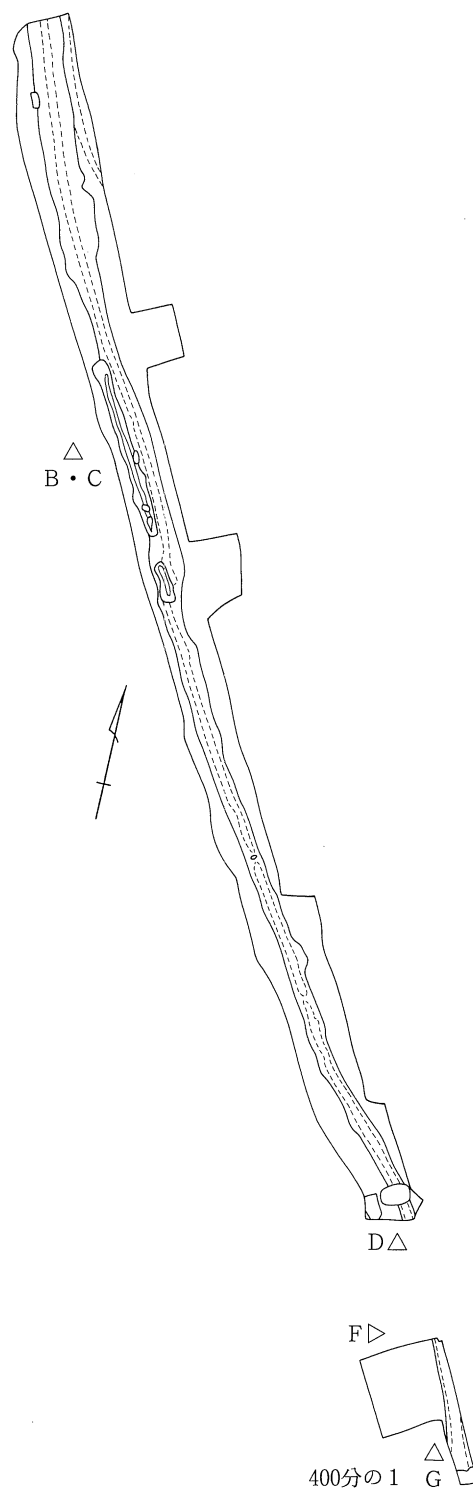
調査面積 780㎡（確認、本調査）

担当者 田所真

現況 茶畑、荒蕪地

確認調査

2×4 mのトレンチを5ヶ所、2×5 mのトレンチを2ヶ所現道に直行して設定し遺構の確認を行った。この結果北側の3ヶ所のトレンチで道路状の遺構が確認された。他に先土器時代に関する試掘調査を5ヶ所で行った結果、南から2番目のトレンチ（☆印）において、2点の自然礫と1点の剥片とが確認された。いずれもBB-II層下部からの出土である。なお、現地表面からBB-II層までの深さは約1.8mであった。



本調査

道路状遺構は、ほぼ現道にそって東側の調査区内を南北に走行している。確認面は、現地表面より約20cm下のソフトローム直上層であった。遺構の規模は、幅約1.5m、深さ0.1～0.4mであり、長さ約70mにわたって調査することができた。出土遺物は、調査区域北端の覆土中より8世紀中頃の土師器杯が1点検出されているほか、調査区域全体で縄文土器片が出土しているものの量は少ない。

3) 第3地点の調査

所在地 市原市中高根字南名山1342-26地先他

調査期間 平成元年10月1日～11月30日（確認、本調査）

調査面積 377㎡（確認、本調査）

担当者 田中茂良

現況 山林、荒蕪地

確認調査

現道の東側に調査地区の形状に合わせて、2×5mから2×10mのトレンチを現道に並行、あるいは直行して4ヶ所、また、2×24mのトレンチを調査区南西寄りに、2×76mのトレンチを東寄りに並行して設定した。また、北側の1ヶ所と西側の2ヶ所でトレンチを設定して先土器時代の調査を実施した。

南西のトレンチから、方形周溝状遺構と思われる溝が確認され溝の覆土上層で多量の礫が検出された。東側のトレンチでも数ヶ所で、溝及び土壌が検出された。

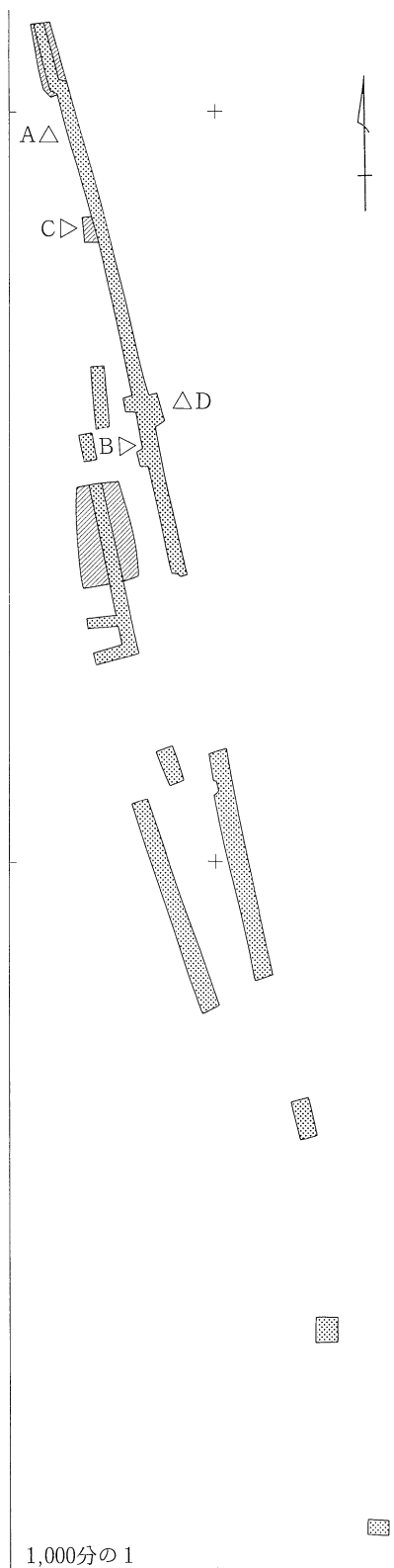
この結果、方形周溝状遺構を中心とした13×8m程の範囲と、溝、土壌などの確認された部分2ヶ所を拡張して本調査を行った。

本調査

先に確認された方形周溝状遺構2基、溝状遺構2条、土壌2基について調査を実施した。

方形周溝状遺構は、周溝の一部を共有しており、周溝覆土中から自然小礫が多量に検出されるとともに、奈良時代以降の小型甕型土器なども検出されている。

遺構の規模は、南側の1号方形周溝状遺構では周溝内側で南北9.2m、東西8.4m以上を測り西側は調査区域外となる。溝の幅は、北辺1.6m、東辺1.3m、南辺1.2mを測り、溝底の各所に0.2～0.4mの窪みがある。北側の2号方形周溝状遺構は、南辺を1号方形周溝状遺構と共有しており溝幅は北辺1m、東辺1.2m、西辺1m以上で、周溝内側で南北7.6m、東西7mの南東を除く3辺の途切れる形態となる。2基とも中央に土壌状の落込みがあるが、



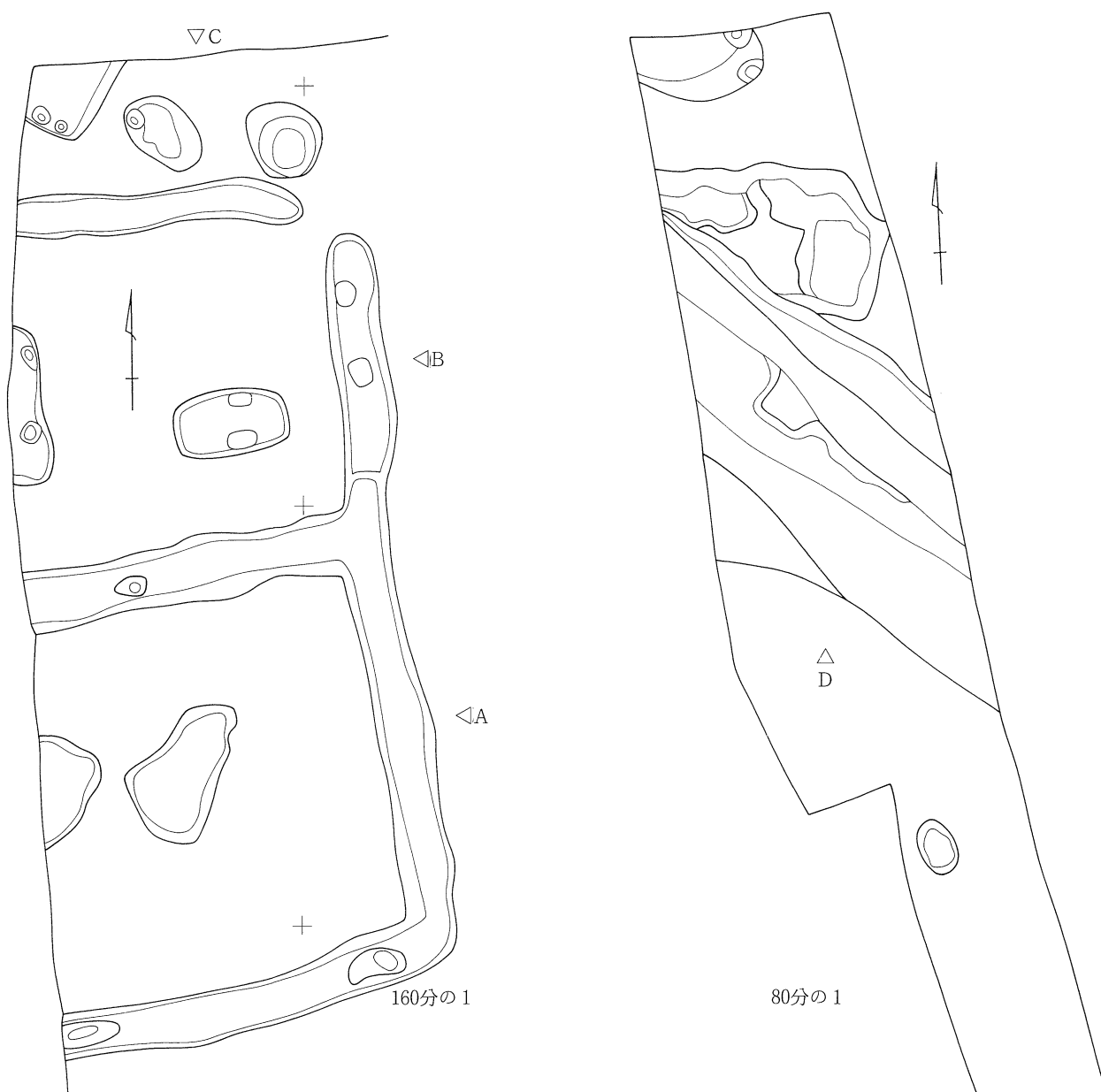
第7図 第3・4地点トレンチ配置・本調査範囲

不整形で浅く主体部とは確認できなかった。

これらの方形周溝状遺構は南北でその形態に差があり、2号方形周溝状遺構は弥生時代中期の方形周溝墓とも思える形をしているが、周溝を共有しており奈良時代以降の遺物も出土していることから歴史時代の方形周溝状遺構と考えられる。

東側トレンチ北端とその南側で、溝状遺構を調査した。北端の溝状遺構は途中で段があり部分的に踏み固められた痕跡もあり他の地点で検出されているような道路状遺構と同様のものである。溝状遺構および土壌からは、遺物を検出することができず、明瞭な時期の確定ができなかった。

また、先土器時代の調査は、BB-II層下層まで掘り下げたが、遺物は認められなかった。



第8図 第3地点方形周溝状遺構・道路状遺構実測図

4) 第4地点の調査

所在地 市原市上高根1600番地先他

調査期間 平成4年6月16日～6月30日（確認）

調査面積 1433㎡の10%、143㎡（確認）

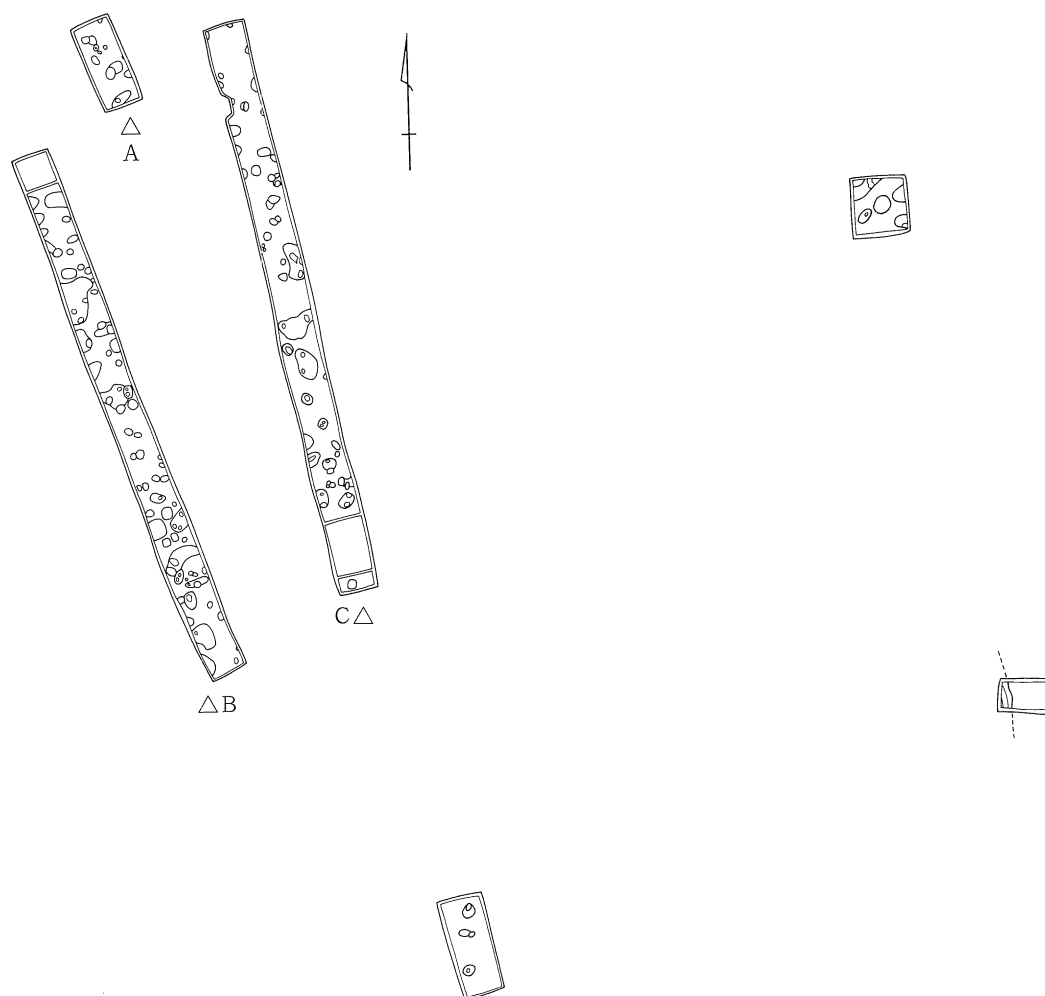
担当者 半田堅三

現況 荒蕪地

確認調査

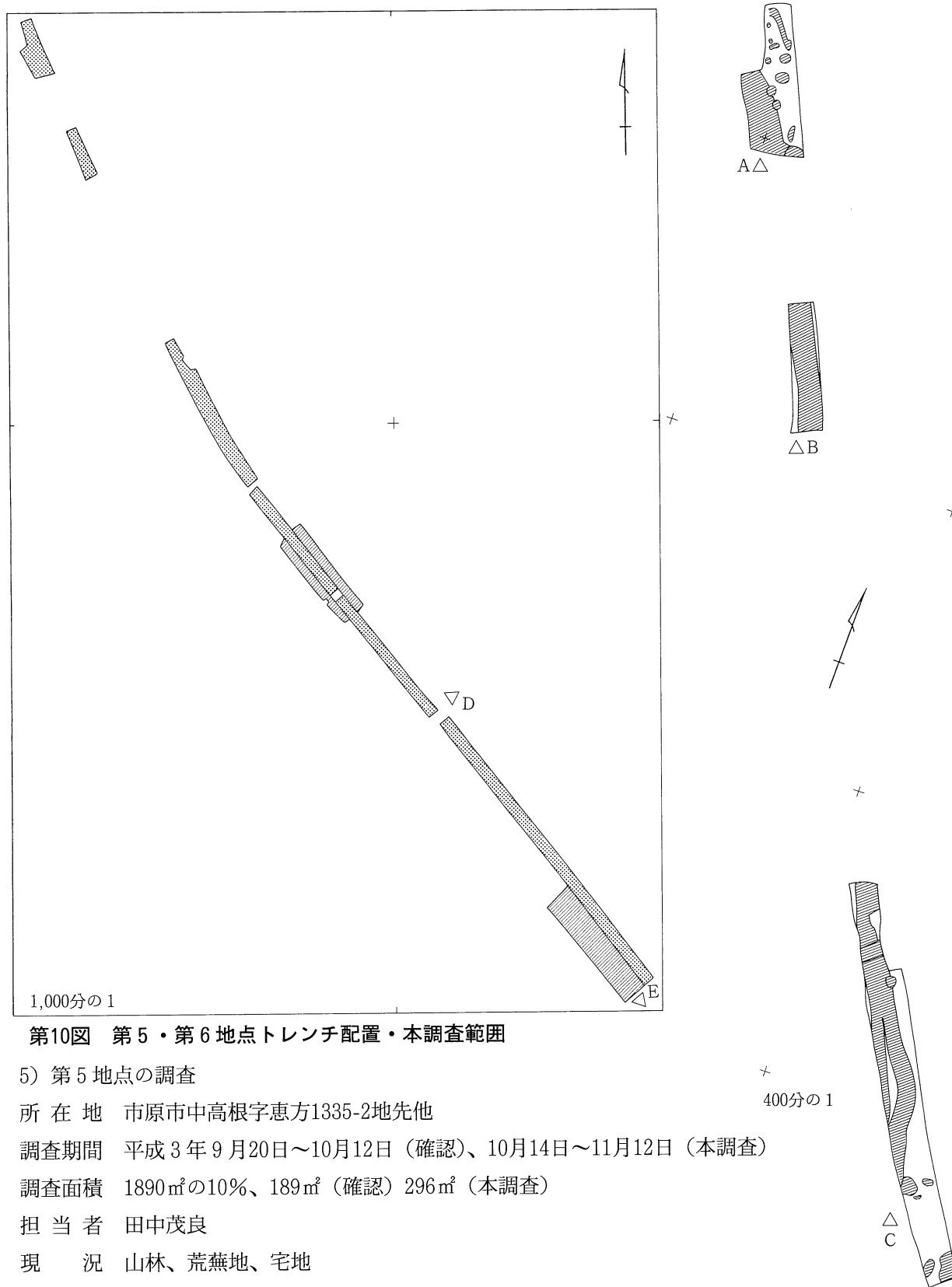
北側に現道に並行して2×30mの2本とその間に2×5mのトレンチ、南側で、2×3・4×4・2×5mの3ヶ所のトレンチを設定した。また、北側の2ヶ所で先土器時代確認の調査を実施した。

全域にピットが散在するが大部分が木根の攪乱で、遺構は南端トレンチ西側の道路状遺構のみだった。この遺構は、現道の下に入り込み調査範囲内ではこれ以上確認できなかった。また出土遺物は縄文式土器片数点と自然礫1点のみで、先土器時代の遺物も確認できなかった。



400分の1

第9図 第4地点全体図



第10図 第5・第6地点トレンチ配置・本調査範囲

5) 第5地点の調査

所在地 市原市中高根字恵方1335-2地先他

調査期間 平成3年9月20日～10月12日（確認）、10月14日～11月12日（本調査）

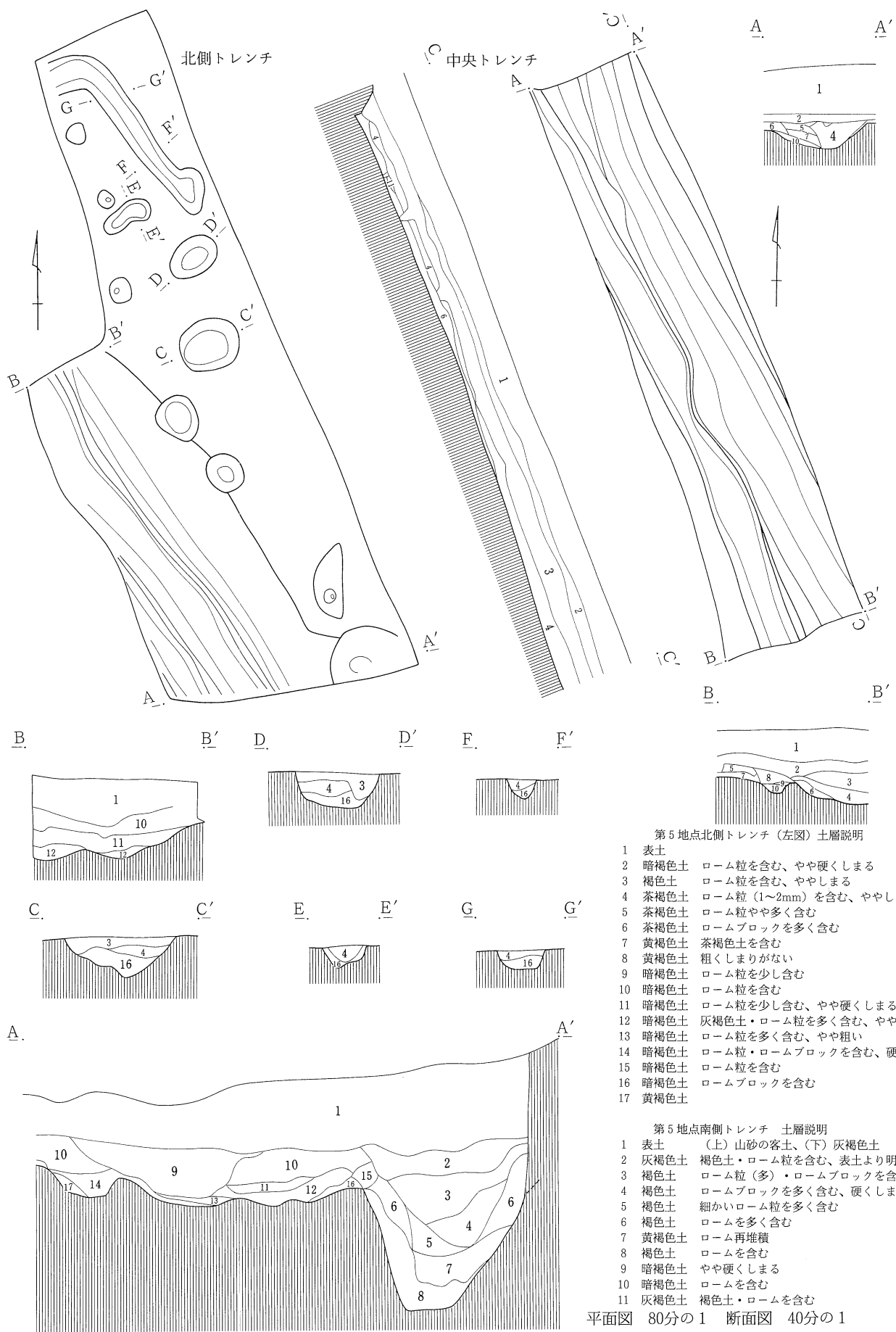
調査面積 1890㎡の10%、189㎡（確認）296㎡（本調査）

担当者 田中茂良

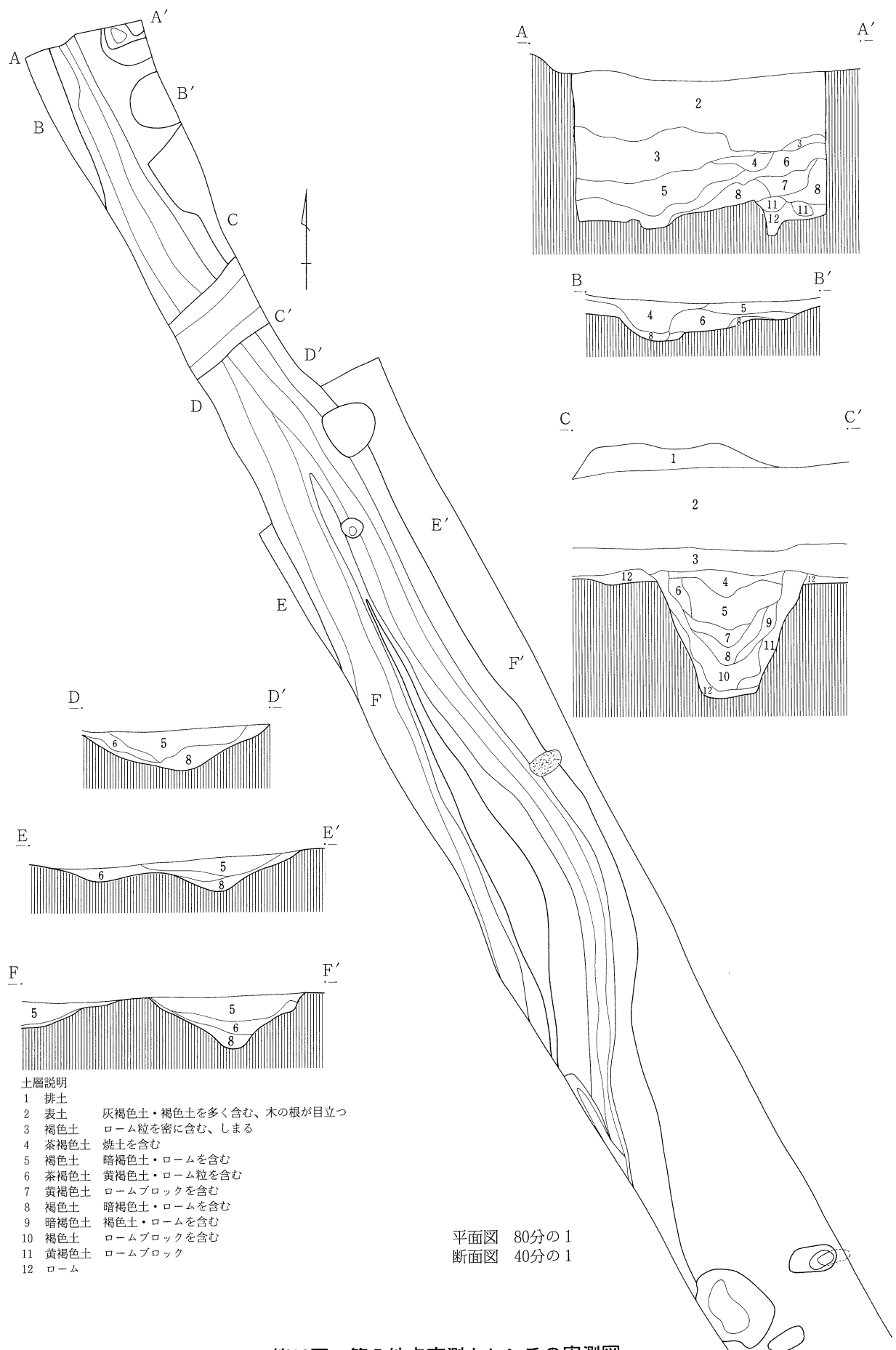
現況 山林、荒蕪地、宅地

確認調査

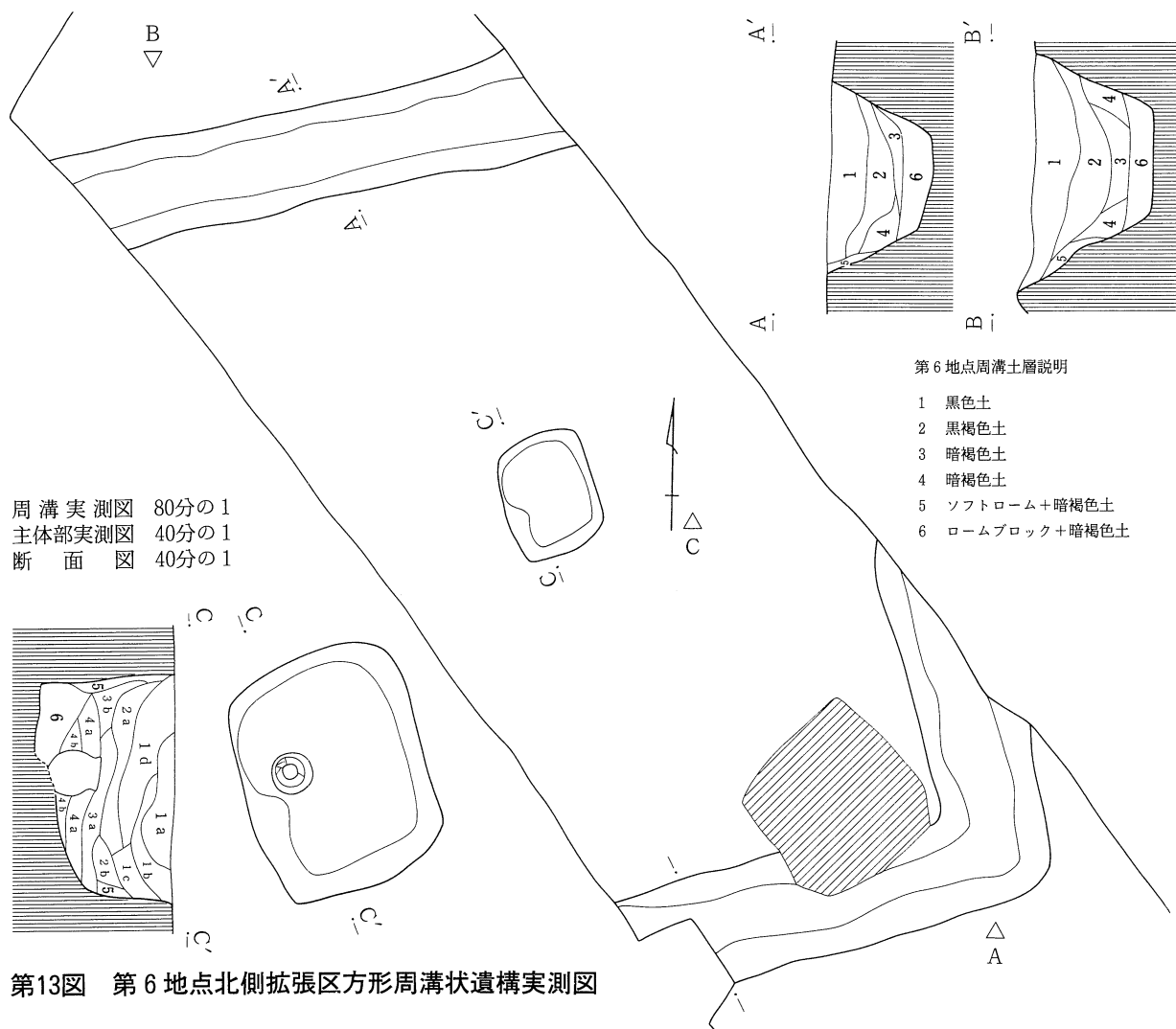
第1地点調査時に南側調査区として、3ヶ所のトレンチを設定して調査を実施した。いずれのトレンチからも道路状遺構が確認されるとともに、縄文時代の陥し穴1、中近世の溝状遺構や土坑が検出された。共伴遺物はなかった。



第11図 第5地点北側・中央トレンチ実測図



第12図 第5地点南測トレンチの実測図



第13図 第6地点北側拡張区方形周溝状遺構実測図

6) 第6地点の調査

所在地 市原市上高根字駒野1607-4地先他

調査期間 平成2年10月1日～10月31日(確認、本調査)

調査面積 1370㎡の10%、137㎡(確認) 200㎡(本調査)

担当者 高橋泰男

現況 山林、宅地

確認調査

現道にそってほぼ直線状に、幅2mのトレンチを延長約107mにわたって3本設定し調査を行った結果、ほぼ全域で道路状の遺構が検出された。特に南側では、幾つもの溝が複合した状態だった。一方北側の道路状遺構の途切れる部分で、方形周溝状遺構の可能性が考えられるトレンチと直行する溝が2本並んで検出された。この結果これらの2ヶ所を拡張して本調査を行った。

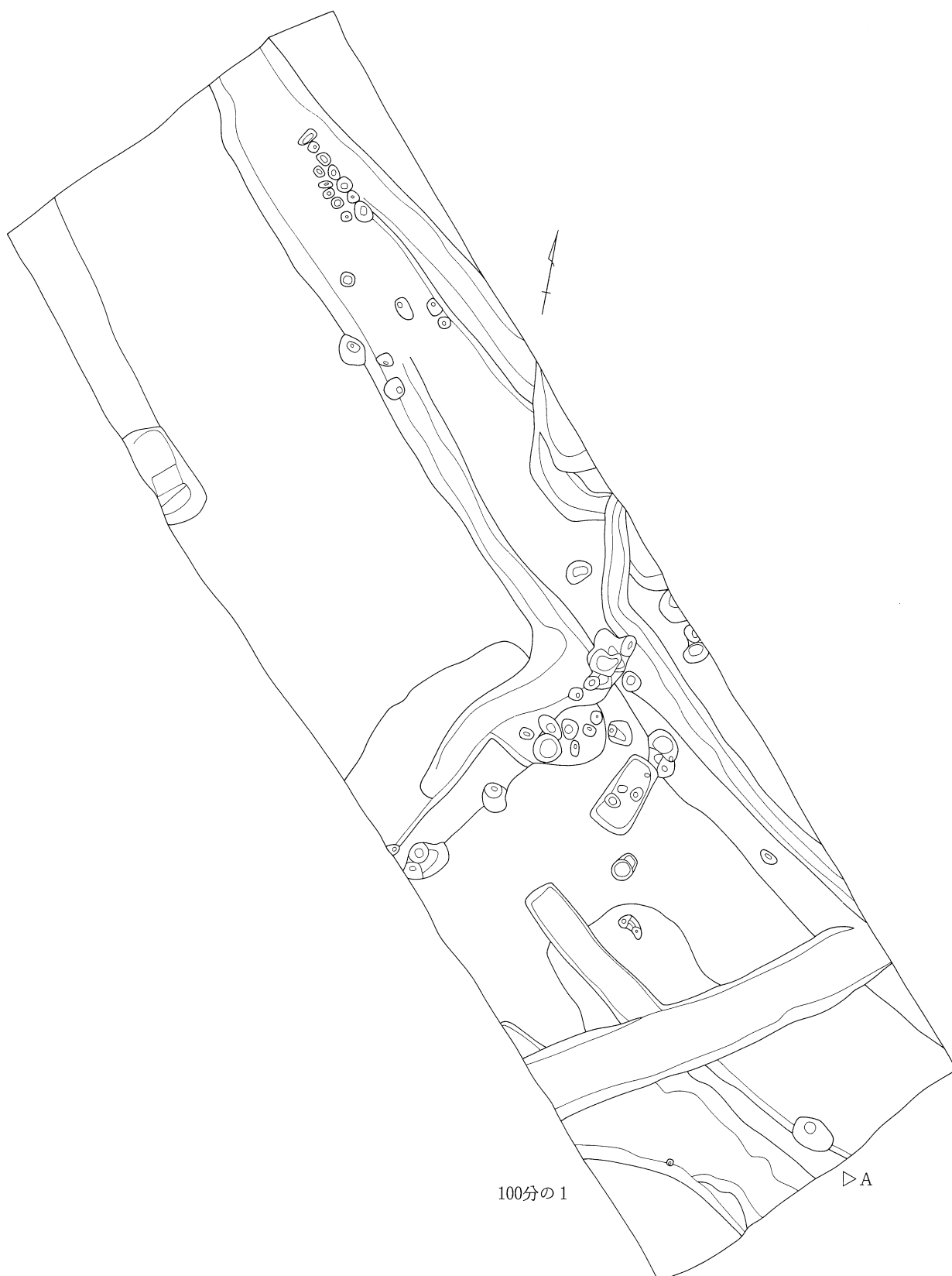
本調査

北側の調査区において、蔵骨器の埋納された主体部を伴う方形周溝状遺構が1基検出された。方形周溝状遺構の主体部から、土師器の蔵骨器、北側周溝覆土中より須恵器片が集中して出土した。

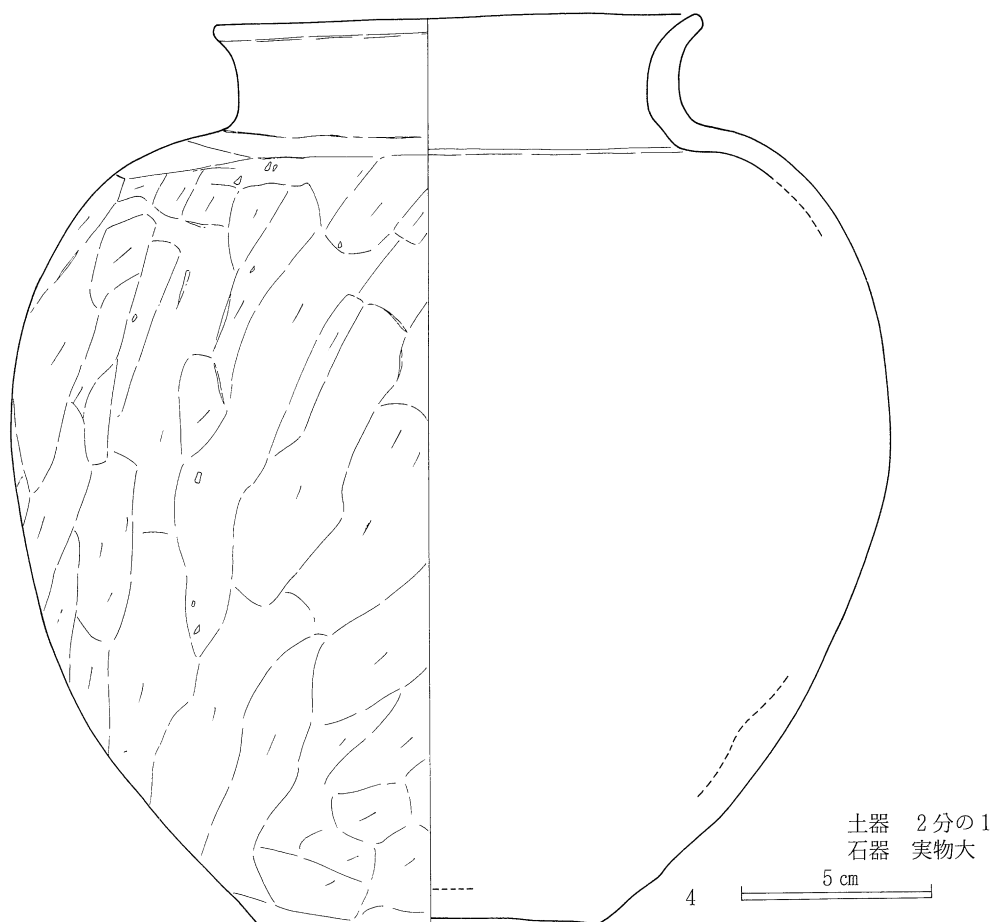
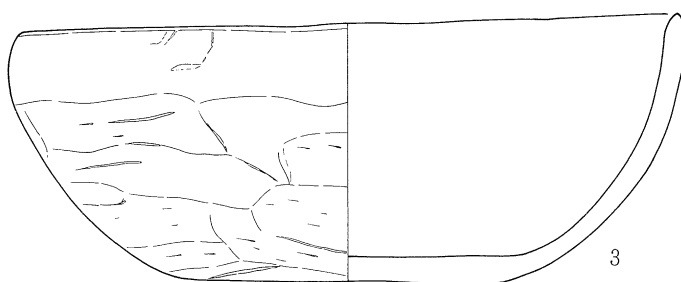
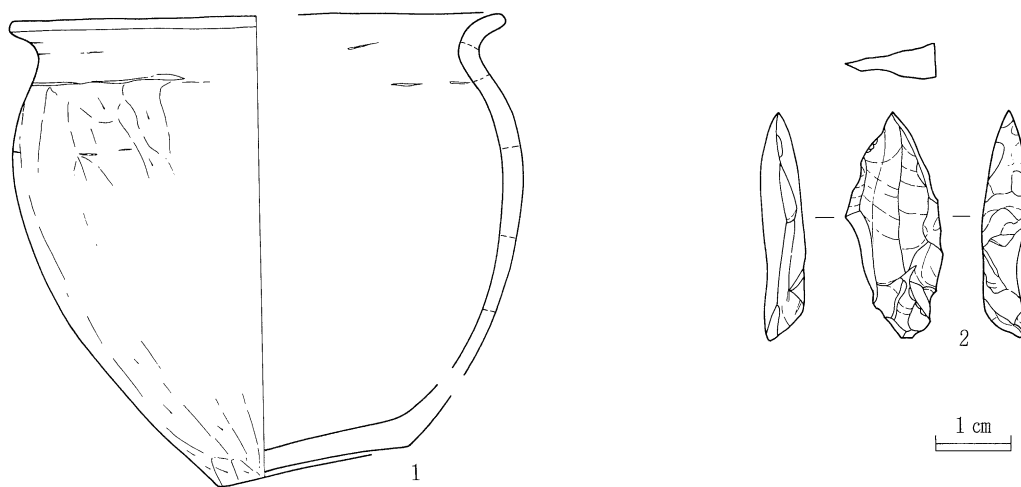
南側では、道路状遺構、溝などが検出されたが共伴する遺物はなかった。

方形周溝状遺構主体部土層説明

- 1 有機質土主体
 - a 黒褐色有機質土 ローム粒極少量混入、しまり弱い
 - b 極暗褐色有機質土 ローム粒極少量含む、しまり弱い
 - c 極暗褐色有機質土 ローム粒やや多く含む、しまり弱い
 - d 暗褐色有機質土 ローム粒やや多く含む(ローム・有機質土各50%)
- 2 ローム主体
 - a ローム粒やや多く、ロームブロック少量含む
 - b ローム粒・ブロックやや多く含む、しまり弱い
- 3 有機質土主体
 - a 極暗褐色有機質土 若干のローム粒・ブロック(径3~4mm)若干含む
 - b 暗褐色有機質土 ローム粒・ブロックやや多く含む、炭化物一部に混入
- 4 ローム主体
 - a 褐色土・ローム粒・ブロック主体、ローム量は80%以上、ややしまる
 - b 褐色土・ローム粒・ブロック主体、ローム量は80%以上、しまり弱い
- 5 暗褐色有機質土 若干のローム粒を含む、しまりは最も弱い
- 6 暗褐色土 少量のローム粒・ブロックを含む、しまりは弱くもろい



第14図 第6地点南側拡張図道路状遺構実測図



第15図 各地点出土の遺物

第15図1は、第3地点1号方形周溝状遺構東溝で検出された土師器で、東溝南寄りに礫とともに細片化して出土している。(図版7に出土状況を掲載)

口径13cm、器高12cmを測る。体部は縦方向のヘラ削り口縁部は横方向のナデを施してある。全体的に依存状態は悪いが、現状から復元すると底部がかなり歪んだ形となる。

第15図2は、第6地点の南側道路状遺構の覆土中から検出されたナイフ形石器で黒耀石製である。全長20mm、幅12mm、厚さ5mmを測る。右側面を調整し、左側に刃部を作っている。

第15図3は、第6地点北側拡張区で検出された、方形周溝状遺構の主体部内に埋設された土器の一つで、第15図4の土器の蓋として使用されていた。

口径17.8cm、器高7cmで口縁の一部を除いて完形である。白色・透明の微砂粒を含み焼成は本来は良好であるが火熱を受け脆くなっている部分がある。外面は赤橙色、内面が赤褐色を主とし、一部に暗紫色を呈する部分がある。

第15図4は、第6地点北側拡張区で検出された、方形周溝状遺構の主体部内に埋設された土器で、器高23.9cm、口径12.8cm、胴部最大径23cmを測る。

胴部中位から下位にかけて表裏対称の位置に黒斑があり、その周囲は橙褐色、それ以外の部分は赤褐色を呈している。褐色の1～2mmの粒子がやや目立つほか白色の微砂粒がわずかに含まれている。焼成は良好でまったくの完形である。

胴部は、縦方向のヘラ削り、頸部を横にヘラで整形し口縁にかけては横にナデで整形している。

主体部内に、第15図3の土器を蓋としてローム主体の土と有機質の強い土を互層に固めて埋設されていたもので、内部には、火葬骨が木炭とともに収められていた。一体分の人骨と思われるが四肢骨の一部がそれと認められるだけで他は細片化している。

他に第2地点道路状遺構北側から、土師器杯1点が出土しているが、既に昭和62年度の年報①に収録されているためにここでは図示しなかった。また、第3地点、第6地点等で比較的まとまって土師器、須恵器が出土しているが、いずれも道路状遺構や溝状遺構からの出土で細片化しておりここでは図示しなかった。

註

① 田所 真『中高根・南名山遺跡』「財団法人市原市文化財センター年報 昭和62年度」

平成元年3月 財団法人市原市文化財センター

5 結 び

蔵骨器を伴うものや周溝を共有するものなどの方形周溝状遺構の検出など、古墳時代集末期から奈良時代にかけての墓制の一端を確認できたのも成果の一つではある。しかし、遺跡のほぼ全域で確認された道路状遺構も大きな成果の一つといえよう。

溝状遺構や道路状遺構は従来「時期不明の溝」などと一括して記述されていたものではあるが、「調査の経緯と遺跡の環境」の項でも述べたように、最近では古代から中世にかけての道路遺構・駅路・伝路・鎌倉街道など交通交易関係の考古学的な研究が盛んになってきている。南名山遺跡もそのような研究論文に遺跡名がのり、図上にポイントが印されている①。しかし出典とされているものが「遺跡発表会要旨」②、「年報」③などのみで、図面などもそれぞれに見合った程度のスケール、精度のものしか掲載されていなかった。

今回の報告書作成にあたって、論考などに踏み込んだ記述はできなかったものの、各年度にまたがりばらばらだった図面を一つにまとめ公開できただけでも調査を担当したものの一人として若干の責任を果たせた思いである。しかし、文献上から、地籍から、地形図から、そして発掘調査の結果からと様々な分野から有能な研究者がこれらの道を追いかけている。同じ道の一部かと思われる、荻原野遺跡、山田橋大塚台遺跡を調査した筆者としても、この段階にとどまらず、近い将来に本遺跡で確認された道路状遺構について何等かの形でまとめてみたいと考えている。怠惰な筆者として必ずとか何時までに、などというお約束はできないが、乞う御期待といった所で、それまでは、この報告書で御寛容願いたい。

調査の着手から足掛け9年になってしまったが、ようやく南名山遺跡の発掘もこの報告書の刊行で終了しようとしている。それぞれの発掘調査期間は、短いもので2週間、長いものでも2ヶ月と細切れの調査だった。また担当者も年度毎に替わり、執筆は、唯一確認調査のみで終わってしまった調査の最終年度を担当したことと、以前の担当者の異動などで番がまわってきたという状態で、平成3年度までの発掘調査については、センターで今行われている調査と言うレベルでしか見ておらず、調査期間内に1回でも見学に行けばいいほうだった。このような状態の中で本報告書が幾許かでも研究者の資料として活用できるものであるとすれば、それは、以前の担当者各位が詳細な記録を残しておいてくれたお陰である。また万一不明確な点や誤りがあるとすればそれは、それらの記録を読み取れなかった筆者にその責がある。旧担当者各位にはここに御礼と御わびを申し上げておく。

註

- ① 大谷弘幸『西上総地域の古代道—いわゆる鎌倉街道を中心として—』「研究連絡誌」第41号平成6年6月 財団法人千葉県文化財センター
- ② 各年度の『調査遺跡等一覧表』「市原市文化財センター遺跡発表会要旨」に面積、出土遺物、遺構の概要が掲載されているが、調査内容の発表、紹介は行われていない。
- ③ 各年度の『中高根南名山遺跡』「市原市文化財センター年報」では、略図を掲載して説明を行っているが、すべての調査について同程度の記述がなされているわけではない。

写真図版



調査前の状況



第 3 図 A



第 3 図 B



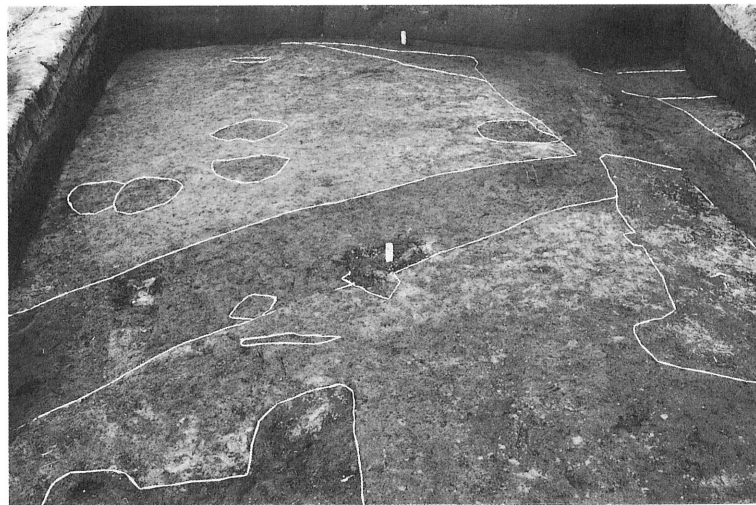
第 3 図 C



第 3 図 D



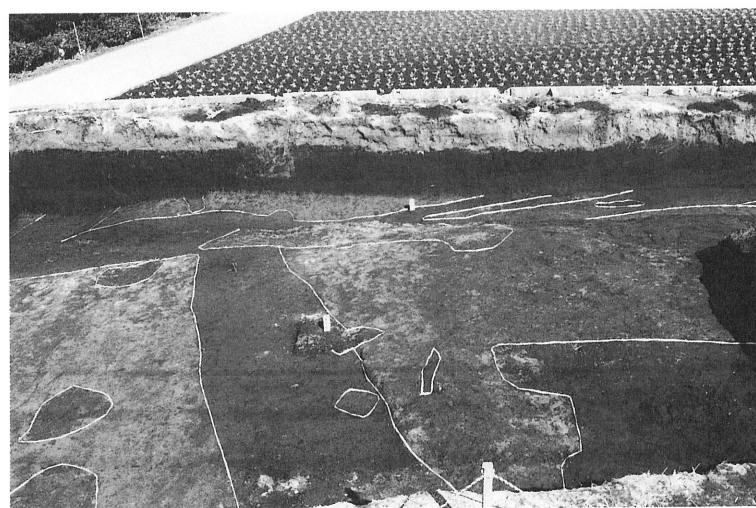
第3図E



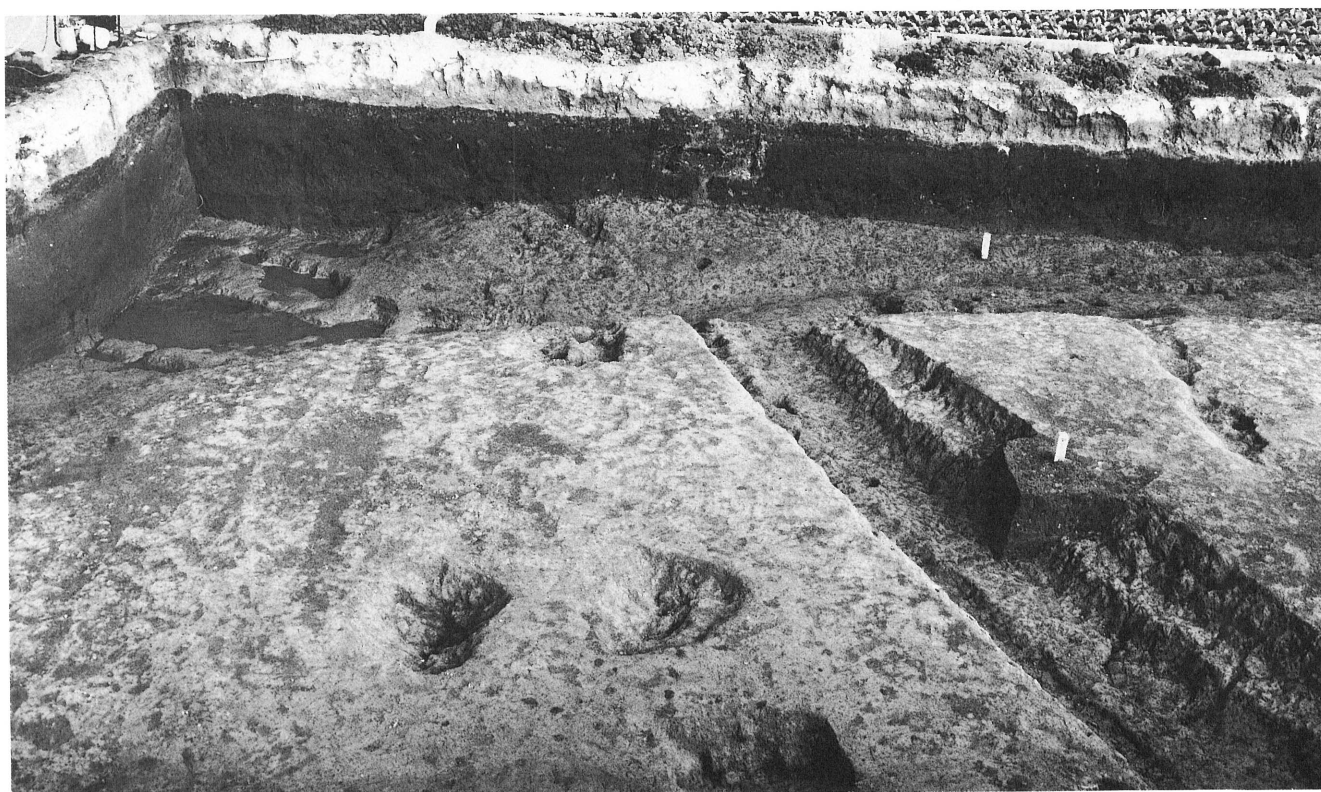
第3図G



第3図F

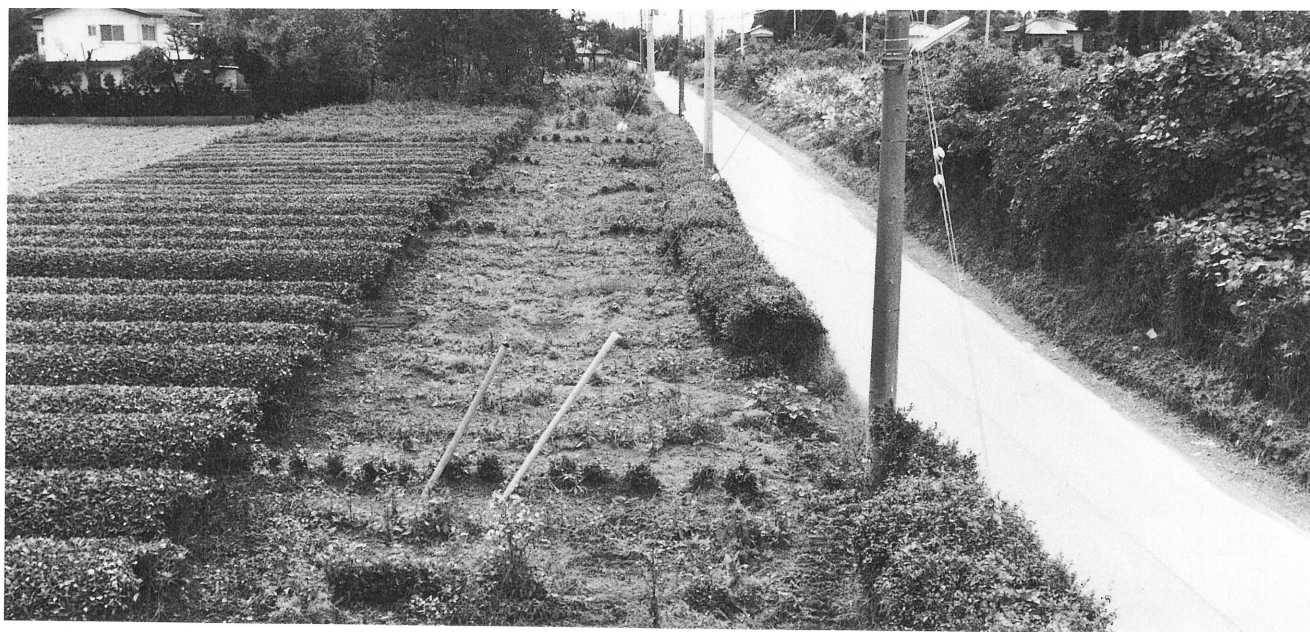


第3図H

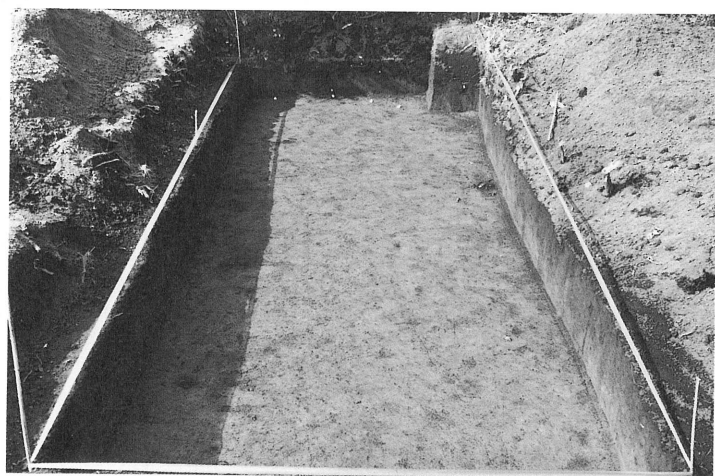


第1地点拡張区北半

図版3 第2地点の調査①



調査前の状況



第6図A



第6図B



第6図C 道路状遺構検出状況



道路状遺構（上下とも）



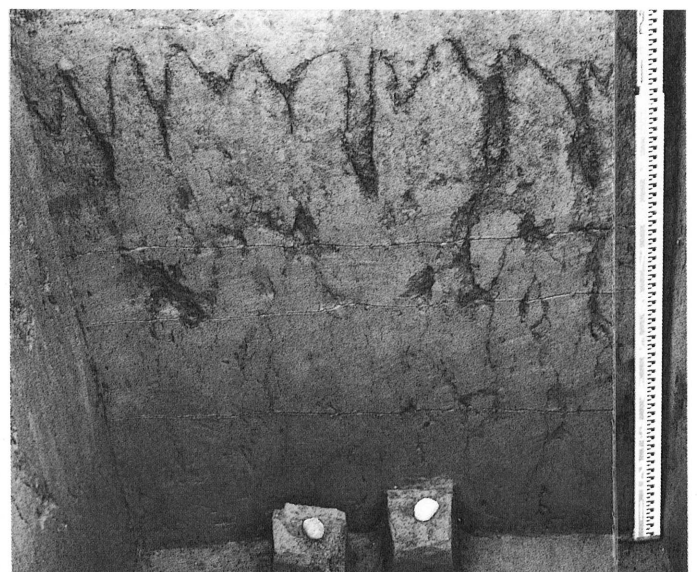
第6図F



第6図G



（上）第6図D （下）第6図E



プレ遺物検出状況



調査前の状況



1号方形周溝状遺構 第8図A



2号方形周溝状遺構 第8図B



1, 2号方形周溝状遺構 第8図C



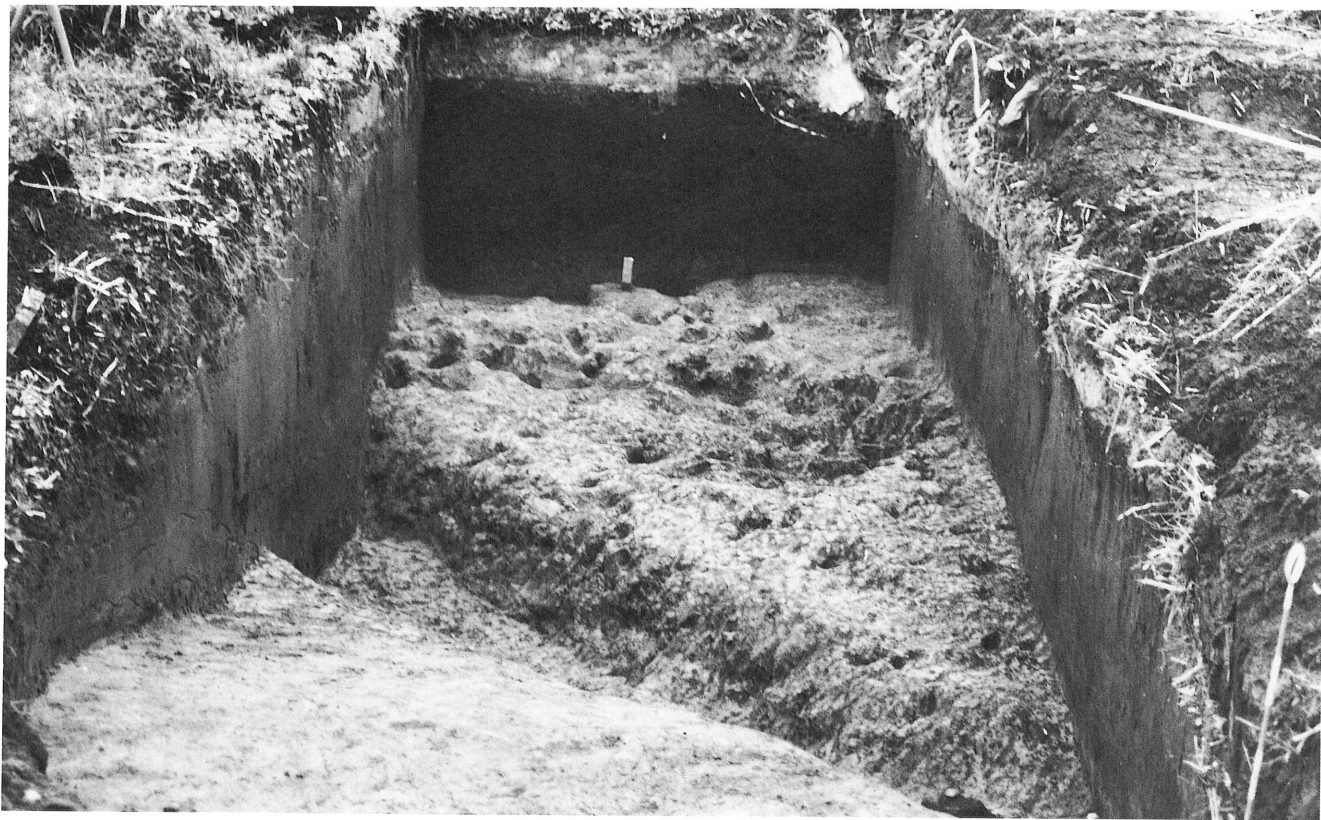
第7図A



1号方形周溝状遺構掘り上り 第8図A



2号方形周溝状遺構掘り上り 第8図B



第 8 図 C



第 8 図 D



第 7 図 B



第 7 図 C



第 7 図 D



第9図A



第9図B



第9図C



第10図A



第10図B



第10図C



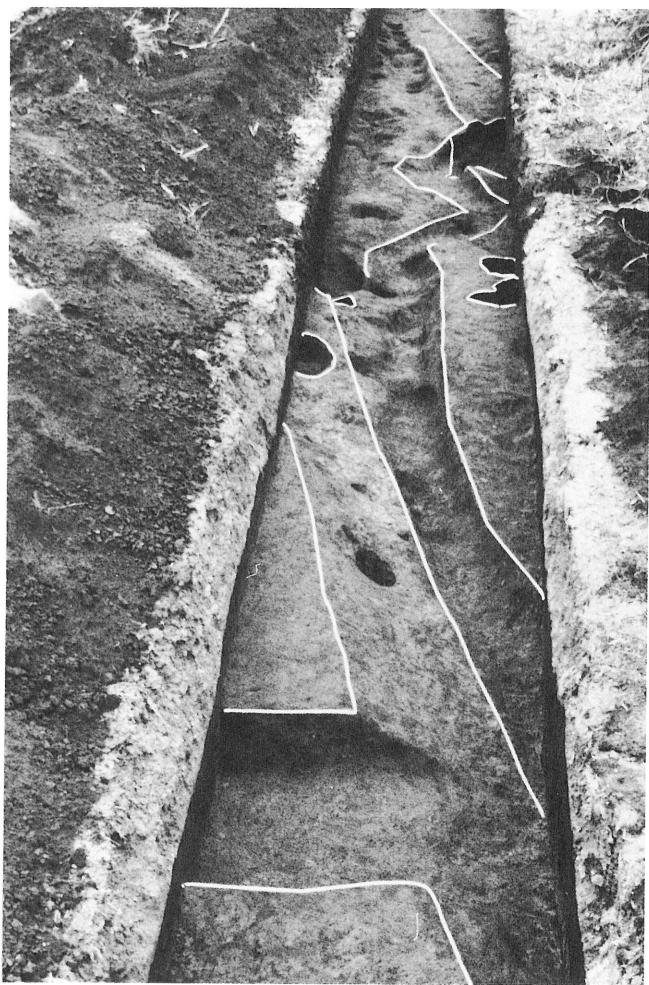
調査前の状況



方形周溝状遺構



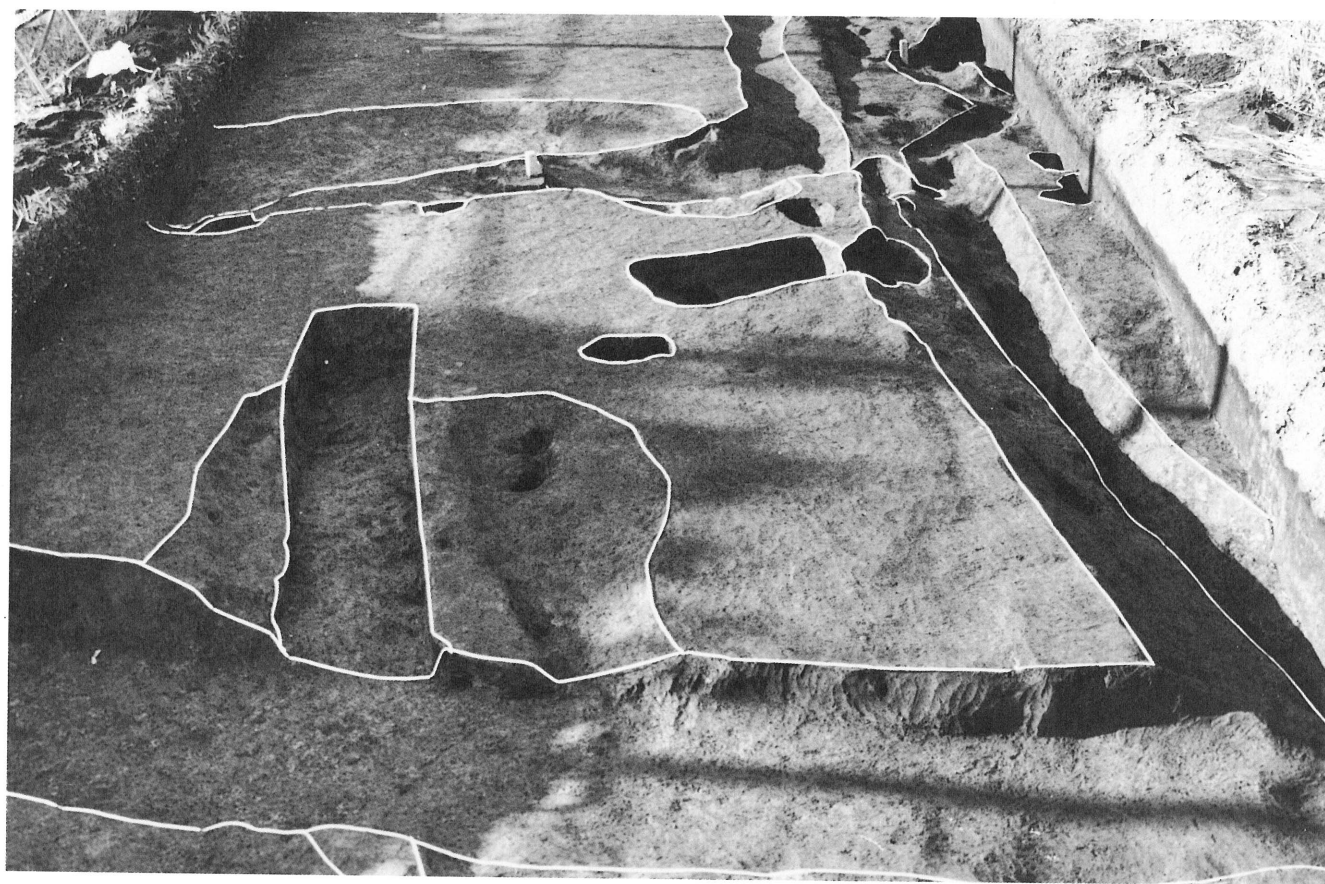
(上) 第13図A (下) 第13図B (右中) 第13図C 主体部



第10図E

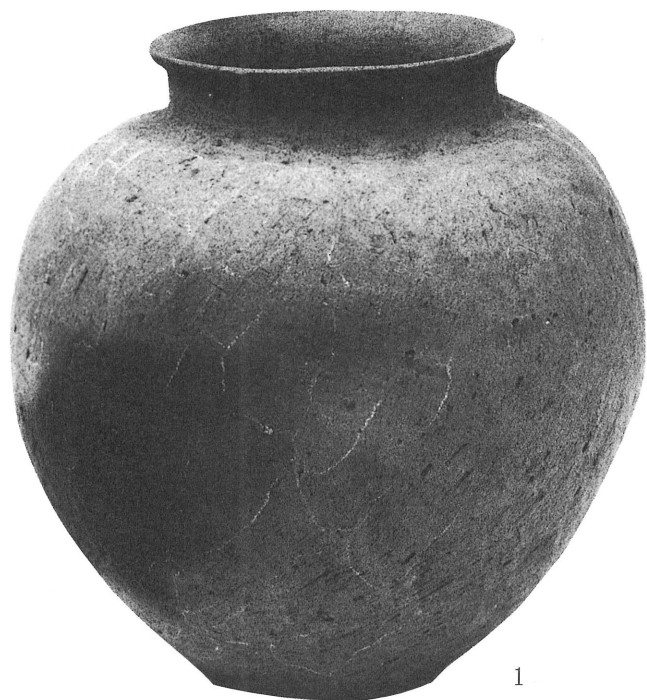


第10図D



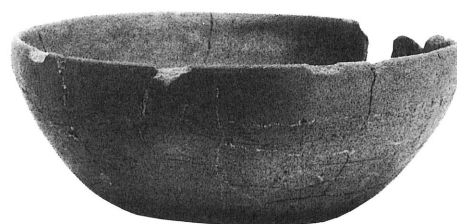
第14図A 道路状遺構・溝状遺構検出状況

各地点出土の遺物



1

1～3 第6地点 方形周溝状遺構
出土遺物



2



1の中に納められていた火葬人骨

3



5

第3地点 1号方形周溝状遺構
出土遺物



4

道路状遺構出土古銭
「文久永宝」

報 告 書 抄 録

ふ り が な	いちはらしなかつかねなやまいせき							
書 名	市原市中高根南名山遺跡							
副 書 名								
巻 次								
シ リ ー ズ 名	財団法人市原市文化財センター調査報告書							
シ リ ー ズ 番 号	第57集							
編 著 者 名	半田堅三							
編 集 機 関	財団法人市原市文化財センター							
所 在 地	〒290千葉県市原市能満1489番地 TEL0436-41-9000							
発 行 年 月 日	1995年3月31日							
ふ り が な 所 集 遺 跡 名	ふ り が な 所 在 地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかつかねなやまいせき 中高根南名山遺跡	ちばけんいちはらしなかつかねなやまいせき 千葉県市原市中高根字 南名山1340-2地先他	12219	221	35度 25分 31秒	140度 4分 45秒	19871016 } 19920630	2,122	道路建設 に伴う事 前調査
所 集 遺 跡 名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
なかつかねなやまいせき 中高根南名山遺跡	包蔵地	縄文時代 奈良平安時代 中世	陥し穴 土壌 方形周溝状遺構 溝 道路状遺構	縄文式土器 土師器 石器など		蔵骨器を伴う主体部を 持つ方形周溝状遺構を 検出 遺跡のほぼ全域で道路 状遺構を検出		